

---

# Paganism.Heretic.

FORNEUS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Paganism・Heretic.

### 【Nコード】

N1950Z

### 【作者名】

FORNEUS

### 【あらすじ】

俺は誰の指図も受けない。俺のやりたいようにやる。それが、破壊に向かっても・・・。  
つてなわけで原作の平行世界スタート！  
一誠の性格改変、原作ブレイクものです。あと、R-18スレスレです

## Life・1

### Side一誠

俺の名は兵藤一誠。周囲の輩にはイツセーだのなんだの言われている。

他校の生徒すら俺の事を知っている。

例えば、今とか……………

「お前、イツセーだろ？ココらは俺様のテリトリーなんだよ。調子くれてんじゃねえぞ？やっちなまえ！」

他校の生徒に囲まれたりしてな？

「適当に遊んでやるよ……………。モブキャラ供が」

「舐めてんじやねえ！」

どうやら、最初の犠牲者はコイツらしい。

前から突っ走ってくる他校生の顔面に右ストレートをお見舞いする。

「ぐあめ……………」

呻き声をあげる他校生の腹に脚を乗せて踏みにじる。グチャグチャと内臓の潰れる音がする。

……なんか、愉しくなってきたぜ！

「ヒイツ……！？」

「無理だ！？………こんなの敵うわけがねえ！」

「逃げるぞ………！？」

オイオイ………逃がすわけねえだろうが？

「さあ、死な無い程度に砕け散れ」

「 次のニュースです。昨夜未明、 高校の二年生4人が路地裏で発見されました。4人の内の1人は内臓破裂残り3人は全身複雑骨折で病院に搬送されました」

全く、物騒な世の中になったもんだなあ？

「おっと、もう8:30か。そろそろ学校に行かねえと」

つー訳で学校に着いた。え？速い？知るか、んなこと  
ああ、早速眠い…………… z z z

「あ、あのお……………」

うーん……………。

誰だ、俺の眠りを妨げる奴は？朝から自殺志願者か？  
命は大切にしろよなあ……………

「あのお……………」

目をこすって声のする方を向くと

黒髪が艶々でスレンダーな女子が俺の席の前にいた。

「やあ、おはよう。何かようかな？」

え？変わり身が速い？そりゃ、美少女と話をするんだから、ちゃんとした姿勢で臨まないとな。

「わ、私と付き合って下さい！」

顔を赤らめながら彼女はそう言った。

「なんでこんな美少女がイツセーの彼女なんかにいいいい！」

「世の中のシステムが反転したとしか思えない……。イツセー、まさか何かの弱味でも握られているのか？」

なんて声が外野から聴こえる。

ああ、ウゼエ……………

まあ、負け犬の遠吠えってやつだな。ザマア

そんなこんなで浮かれたまんま授業が終わった。

え？デートの約束？……………したに決まっておるうが！

日曜日〜日曜日〜

「ケタケタケタケタケタケタ……………」

「あ？」

変な声が聴こえると思って後ろを振り向くと、明らかに、気違いな声をあげる上半身が裸の女、下半身が巨大な獣という出で立ちの人外の化物としか思えない異形がいた。

……………俺の気分を害した罪は重いぞ？

「『迷宮絲』！」

地表から絲が這え出て人外を拘束する。

「さあ、哭き叫べ」

グチャツッ!!

俺の放った右手は奴の肋骨を難なくへし折る。

「ギア…アア……………」

「オイオイ、まだこんなの序の序の序の口だぞ？」

更に右、左、右、左……………と拳を打ち込み人外の身体を変形させていく。

「コ、コロ…………セ」

「馬鹿いうな。まだまだ死なせてやんねえよ」

俺は心臓や脳を避けながら骨を砕いていく。手に血がこびり付く。

……………人外でも赤い血の奴がいるんだなあ？鉄の匂いもする。

殴り過ぎて内臓が飛び散ってるなあ……………

ズブツ!



「じゃあお前、コレを握り潰せよ」

俺は人外の腹からドクドクと鼓動する心臓を傷付けないように抉り出す。

自分の手で終わらせてあげようというんだ。俺、優しいだろう？

「ホラホラ、さっさと潰せよ。嫌なら俺が潰させてやるよ」

「！？」

人外の腕を引き抜く。辺りに血が飛び散るが気にしない。ソレを手で持って

グチャッ！

そのまま握り潰す。

………脳が生きてるかも知れないから潰すかな？

右手に力を込めて頭蓋骨を砕く。

液体がスゲエなあ？脳漿か？

取り敢えず砕けた頭蓋骨を真つ二つに開いて脳を引っ張り出し脳を壁に投げつける。

暫くすると、人外の身体は霧のようになり消え去った。  
跡に残るのは、充滿した血の匂いと飛び散った血の痕だけだった。

ふう、遊びすぎたかなあ？血の匂いが染み付いてるなあ……  
さっさと帰って風呂入って寝よ。

S i d e O u t

## Life・2

### Side一誠

ヤッファー！ヒヤッハー！

…………… すまない、少し取り乱した。

何はともあれ今日は日曜日！そう、デートだ！

彼女の名前？まだ言っただけだったか？

天野夕麻っていう名前だ。

取り敢えず、三時間前に待ち合わせ場所に行っておこう。

てな訳で三時間後だ

「ま、待ったかなあ？」

「いや、俺も今来たところだよ」

男なら一度は言ってみたい言葉を言えませ！

それから、2人で街でうろつろしたり、絡んできた不良を再起不能にしたり、追い掛けてくる人外の気配を避けたりした。

いやあ、なんかもう満足です。家族に看取られながら老衰で死ぬく

らい。

後二つには些か腹が立つが…………。

そんなこんなで、夕暮れ時になり、今は町外れの公園にいる。人が無いなあ…………？まあ、ありがたいが。

「ねえ、一誠くん」

「ん？なんだい？」

「私たちの記念すべき初デートだから、一つお願いしてもいいかな？」

「ああ、いいよ」

「あのね…………死んでくれないかな」

夕麻ちゃんはうつすらと涙を浮かべながら言った。

ズブツ！

俺の腹に何かが突き刺さる。

……これは…槍？

「ゴメンネ、一誠くん……」

「遅かったみたいね……。私の領地でこんなことをして赦される  
と思っているの？」

さっきまで、撒いていた人外が俺の前に姿を現した。  
現れた人外は血のように紅い髪をした女だった。  
まともなカタチの人外もいるんだなあ？

「喰らいなさい！」

人外は手の平から巨大なドス黒い球体を造り出す。  
オイオイ、そんなもんはファンタジーの世界だけにしてくれよな？

「させるかってんだ！」

「え？」

俺は絲を片手から出し、夕麻ちゃんを抱き抱えながら、近くの電柱  
にくくり付ける。

「ッ！？神器！」

どうやら人外は驚愕しているようだ。セイ、何だ？良く分からんがココから離れんのが得策だろう。

取り敢えず撒けたかな？

S i d e O u t

S i d e タ麻？

私はどうしたらいいのかなあ？

上からの命令で、神器を宿す、危険因子を始末するようにならされた。  
いた。

今回は、神器を保有している人間の一人誠くんを殺すように。  
だから人気の無いところで始末するためにデートという大義名分で  
あの公園に呼び出すことにしていた

だけど、私は彼の事が本当に好きになった。  
そして、遂にあの公園にたどり着いたの。  
私はイツセーくんを殺そうとして光の槍で貫いた。  
だけどそこに紅髪の悪魔が現れて、私を消滅させようとしていた。  
もう、いつそのことココで彼と一緒に死のうと思っていると、彼は  
自分を殺そうとした私を抱き抱えて……………。

S i d e O u t

S i d e 一 誠

イテテテ……………。  
つか、コレは死ぬんじゃないかな？意識が朦朧してるし、出血  
凄しい。まあ、美少女に殺されんならそれも本望ってか？

「ゴメンネ、ゴメンネ……………」

夕麻ちゃんが、泣きながら俺の腹の傷の手当てを始める。

「別にいいよ。だから、泣き止め、な？」

「ココじゃ応急手当でしかできないから、私が住んでいる所に行くね」

夕麻ちゃんはそういうと、背中から黒い翼を生やして今度は俺を抱き抱えながら空へと飛び立った。

ココは教会か？十字架あるしな。ただ、磔になっている聖人の彫刻の頭部が破壊されてるのは如何なものか？

「コレでなんとか……………」

どうやら、俺の手当ては大方終わったようだ。

「ありがとう」

「ごめんなさい……………。私のせいで」

「その話なんだが、詳しく教えてくれないか？」

俺は何度か人外を殺したことはあるがソレが何なのかは良く知らな



かった。

「うん。説明するね……………」

ココでソレを聞いていなければ何も始まらなかったのかも知れない。

S i d e O u t

## Life・3

### Side一誠

「私は墮天使なの。もともとは神に仕える天使だったけれど、墮天使として地獄に落ちた存在……………」

墮天使？まあ、さつき黒い翼が生えてたしなあ？

「さつきの女は何だ？墮天使とはまた別の何かだったか？」

「アレは、悪魔……………。冥界で太古の昔から争っている勢力よ。墮天使は人間を操りながら、悪魔は人間を唆して契約しながら互いに滅ぼし合っているの……………」

成る程なあ……………。

「俺を殺そうとした理由は何だ？」

「私は……………あなたを殺したくなんて無かったの……………。だけど、上からの命令で神器を持つ、墮天使に危険をもたらす者を殺せって……………」

夕麻ちゃんは俯きながら言う。

神器……………さっきの悪魔の女も言っていたよなあ？

「なあ、神器って何だ？」

「神器は特定の人間に宿る規格外の力。大体は人間の社会でしか機能しないけれど、中には私たち墮天使や悪魔、天使の存在を脅かすほどの力を持った神器もあるの……………」

「コレとかか……………？」

俺は右手から『迷宮絲』を放つ。コレが神器だったのか？

「危険要因つてのが神器を宿した人間つてことか……………」

「ごめんなさい……………。謝って許してもらえはすが無いけど、それでも……………」

「許すよ」

「え……………？今、なんて……………」

「だから、許すっていつてんだよ」

「わ、私はあなたを殺そうとしたのよ……………？」

「お前の意思ではなく、上からの命令なんだろう？なら、お前を責めようとは思わない」

「あ、あ……………うう……………」

「アレ？俺、何か悪いこと言ったか？」

「な、泣くなよ！？……………な？」

「ありがとう、ありがとう……………」

泣き止んでもらわないと困るな。取り敢えず、撫でてみよっかな？

「一誠君……………//」

お？泣き止んだ。よかったよかった

「なあ、俺が墮天使に協力すれば危険因子として、墮天使からの抹殺対象にならないんじゃないか？」

「うん。だけど、いいの？命の危険に晒され続けることになるんだよ。」

どうやら心配してくれているようだ……

「いや、俺は二日に一回くらいのペースで吸血鬼みたいな人外と交戦したりしてるから、たいして変わらないよ」

アイツら倒しても倒しても大元みたいな強い奴を殺さなきゃ根絶できなからなあ……………

「ところで、君の本当の名前はなんだい？“天野夕麻”は偽名だろっからな」

「そうだよ……。私の本当の名前はレイナーレ」

レイナーレ……………いい名前だな。

「では、レナって呼ばせてもらおうよ」

「うん、ありがとう」

「ああ。それで、具体的に俺は何を手伝えればいい？」

俺が、レナに聞くと同時に

「レイ……………ナーレ様……………！悪魔が……………仲間がフリードを残して全員……………」

急にドアが開いたと思うと、血塗れになった神父が血を吐きながら絶え絶えに言う。

「俺がソイツの救援に行こう。詳しいことを教えてくれ」

「一誠くん……。今、私の所に回ってきた部下の『はぐれ悪魔  
被い』のフリード・セルゼンが悪魔……。さつき私を殺そうとした  
存在と闘っているの。彼の救援に行ってくれないかな？」

悪魔被い……。？アレか？映画とかで悪魔を滅してる奴……

「了解だ。フリード・セルゼンについて教えてくれ」

「うん。フリードは白髪で言動がちょっとおかしいかも知れない……  
…。

もし、一誠くんが危険になったら、すぐに、戻ってきてね……。？」

レナは俺の前に円状の何かを出現させる。

これは……。魔方阵か？

「ああ、大丈夫だ。行ってくるよ……。レイ」

魔方阵の中へ入ると周囲が光に包まれた

「絶対に帰って来てね？一誠くん……」

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t



## Life・4

### Side一誠

……………着いたのか？

凄いなあ。まるでファンタジーの世界だ。

「悪魔の分際でえ、チヨーシくれてんじゃね でござんすよ。死ね  
死ね悪魔〜！死ね悪魔〜！死んじまえい！！」

アレがフリードか……………。確かに言動めちゃくちゃだなあ？

「お前がフリードか？」

「あゝあゝ誰だよ俺の名前を呼ぶ奴は？」

色々とおかしいが面白れえなあ？見てる分には…………、だ。

「救援に来た。ソイツらが悪魔とかいう人外か？」

「そうだよ、そうだよ、そうざんす。アイツら、クソな クソ悪魔  
く デビルな輩をぶった斬りく 一緒に殺っちゃおうZE!」

「コツチ半分は俺が貰う…………… 『迷宮絲』!」

手始めに近くにいた悪魔を一体取り抑える。

「わーお！神器ちゃんじゃあーりませんか！うんじゃくそれじゃく  
お委せしますZE!」

俺は取り抑えた悪魔を『迷宮絲』ごと引き寄せて、その腹部をズボ  
ンの右ポケットから取り出したナイフで突き刺す。

「ギアアア！？人間風情があ!」

ああ、ウゼエ……………。取り敢えずもつと刺すかな？

腹部に突き刺したナイフを勢いよく引き抜き、両目を抉る。

「キサマア！エルピスを離せ!」

そういえば、コツチにも3匹位いたよな……………。  
仕方がない、さっさとコイツを殺すでしょうかな？

「悪いなあ？もうちょっとゆっくり殺そうと思っていたが、すぐに終わらせてあげるよ」

ハア、勿体ないなあ。せつかく法律に縛られない殺しができたのに……。  
ドスッ！という音と共にナイフを心臓に突き刺す。血が噴き出して、スプリングラーのようだな。

「次は誰だ？死にたい奴から前に出ろ」

「オマエエツ!？」

おいおい……。3匹一気にか？

「『迷宮絲』」

掌から糸を放って一匹の首を締める。……割と容姿のいい女の悪魔だな？

「ひい……!?!イ……ヤ……」

「オマエは後でゆっくりと殺してやるよ。」

今、手から出している糸を近くにあった木にくくり付ける。

「お前ら二匹はすぐに殺してやるよ」

俺はそこら中に糸を張り巡らせ、その糸の中で、悪魔2匹の近くにある糸を糸鋸のように動かして首をじっくりと切断する。

「さようなら、永遠に」

一気に首を切断し、辺りに張り巡らされた糸を二匹に向けて締め上げる。スパスパと人の形をしていた肉体は、欠片となって飛び散る。返り血が酷いな……。風呂入りてえ。さて、一匹残して片付いたなあ？

「おい、フリード！片付いたか？」

呼ぶと、俺同様に返り血で血塗れなフリードが姿を表す。

「はいはい、終わりましたよ、光の刃で首をチョンパして、銃でドタマを必殺必中フォーリンラブしてくれやがりましたぜえ〜？」

さてさて……

「お前、透明になってないで、姿見せろよ人外が」

何か、さつきから視線を感じるんだよなあ？

「ホオ、人間ごときが俺様の透過を見破るとはな？」

「わーおー！しゃらくせえ！」

「黙れ人外。人外ごときが偉そうに喋るな」

「フン、格の違いを見せてやるっ」

人外は装飾剣を俺に振りかざす。おいおい、銃刀法違反だぜ？法律は守れよな？

ああ、人外には適用されないのか。

「フリード、武器を貸してくれ。このナイフじゃ決定打は与えられねえ」

アウトドア専門店買ったナイフじゃなあ？

「予備用の光の刃をかしてやっちゃうよ！ホイ、覚悟はOK？」

「いわれんでも大丈夫だ」

これは……剣の柄か？刃はどうやって出すんだ？取り敢えず力を込めてみるとしよう。

ブウウン！という音を立てて柄から光の刃が形成される。

何か、ビームサーベルみてえだな……。まあ、これならコイツも解体できるだろう。

「さあ、哭き叫べー！」

Side Out

Side一誠

「見えなかるう。喰らうがいい！」

悪魔は刀身を透過しその不可視の切っ先で俺とフリードに剣閃を放つ。

風王結界ってか？全く厄介な奴だなあ？おい。

「おっと、危ねえ」

鋭い一撃が俺を襲ったが、間一髪でフリードから借りた光の刃で防ぐ。  
よし、奴の隙を作れた。任せたぞ……………

「フリード！」

「ひゃっほう！死ねよ！」

間髪入れずにフリードが横合いから光の刃で斬り込む。

「ガハツ……………！？たかが人間2人ごときにこの俺様が！？」

悪魔は憤怒の表情で俺たちを睨む。その刹那、俺の視界に靄がかかる。一体どうしたんだ？フリードを見ると、吹き飛ばされ、血塗れで倒れている。アイツがやられた……………？

更に、腹部に違和感を覚え、見ると血がダラダラと垂れ落ちて滴り、血の池を作っている。

コイツは致死量って奴だな。放って置けば間違いなく死ぬ。

お前はこの程度で死ぬ気か？面白くないな。実につまらない。

なんだあ？頭に男の声が響く。目を開けると、黒い空間に紅黒い光が浮かんでいた。

死ぬ？ケツ……………！お断りだったの。

フン！やはり面白い。封印されてからの輪廻……………悠久の暇は我にとっては些か退屈が過ぎたが、やっとできた我が娯楽を見す見す手放すには忍びない。

ああ？封印だあ、娯楽だあ、知らんがテメエは神器ってやつだろ？なら、力を寄越せよ。



ハハハ、善かろう。精々我を楽しませることだな？異端を継ぐ者よ……………

目が覚めると、俺の視界は靄が晴れてクリアになり、腹部の傷は痕すら遺さずに消えていた。もう一つ、変化があった。さっきまで素の状態であった肘から手首にかけては、黒い籠手が覆う。

「何だ？その籠手は。それで俺を倒せるとでも？」

「知らねえが……………、俺を斬った罪は重いぞ？」

取り敢えず俺は、悪魔の前へ歩を進め、黒い籠手を嵌めた右腕で殴る。

「な、何！？貴様、人間の分際で魔力を制御する……………だと？」

ふと、右腕を見ると紅黒いオーラのような物が覆っている。魔力の制御？この神器のせいかな？

「だが、俺様が負けるわけがない！」

悪魔は再び見えない剣閃を俺に放つ。

そう何度も掛かるわけがねえだろうがよ、人外！

「『迷宮絲』！」

前方に掌から絲を放つ。

「幾ら見えなかつたが」

絲は悪魔の付近を縦横無尽に駆け巡る。

「その実体は常に有るんだろうがぁ！」

絲は不可視の剣を絡め捕える。

俺は絲に力を流し込むイメージをする。すると、籠手から紅黒いオーラの奔流が絲を伝って悪魔に流れ込む。まるで、ワイヤーを走る電流のように、だ。

「ガアアアアッ!？」

さっきの分、返さしてもらうぞ、人外！  
俺は光の刃に黒い籠手から発せられるオーラを纏わせて、悪魔の装飾剣を持つ右腕を切り落とす。地面に落下した腕は徐々に灰になっ  
ていく。

「き、貴様ア……！俺様を誰だと思っ  
ていやがる……！！」

虚勢を張る人外を気にも留めずに、光の刃で至るところを抉り、また、変形させていく。光の刃で斬られた箇所は灰になるようだな？  
悪魔とかいう人外は。良いことを思い付いた。

「『迷宮絲』」

絲を地上から生えさせて、地面に伏している悪魔を地面に縛り付ける。  
更に、別の絲を木にくくりつけて、光の刃を絲で巻く。その絲の先を悪魔に巻きつける。光の刃が悪魔と平行な空間に垂直に固定される。

「キサマア……！何を  
するつもりだ……！！」

「ギロチンのな？」

糸を切る。すると、光の刃は真っ直ぐに悪魔の首を切断する。残った体と首は、自然消滅するだろう。それより……

「フウ、終わった終わった……」

「バツッ！」と音を立てて地面に倒れる。神器のあった肘から手首にかけては素の状態に戻る。どうやら、反動のようだな……。俺は意識を手放した。

S i d e O u t

## Life・6

### Side一誠

うっあ〜………………。ああ？

どうやら寝てた見てえだな………………。ところで、俺は何でベッドの上にいるんだ？

不思議に思い、横を向くと

何でレナが寝てるんだ……………！？

「うう………………。あ、一誠くん起きたんだね？」

「ああ

「大丈夫？痛いところはない？」

怪我……………アレ？治つとる！？

悪魔に装飾剣で貫かれたはずの腹部の傷は完全に消えていた。

「なぜか傷が治っているから痛くはないが、なぜ治ってる？」

「コレの力なの……」

レナは手のひらを翳すと緑色の淡い光が発せられる。  
これも神器なのか……？

「コレは『聖母の微笑み』……。人間だったお母様の形見よ……」

形見……？

「そんなことより、お腹空いてないかな？」

ああ……。そういや、昨日の昼から飯を食ってなかったなあ？

「正直、腹ぺこだ」

「じゃあ、すぐに作るね？」

そういつて、レナは足早に部屋から調理部屋に向かった。

レナの過去……。俺には到底考えが及ばない。

まあ、答えの出ない思考は、一旦置いておくとして、だ。

俺のあの神器………………。どうやら、内包された意思を持っているよ  
うだったなあ？

あの透明マニアの言っていた通りならば、コレは魔力とやらを制御  
できるんだろつ。

だが、その魔力の行使とやらをすると、反動で動けなくなっちまう、  
と言っわけか……………。

何か、あまり使わねえ方がいいかもしれんな。

「一誠くん！ご飯できましたよ」

お、レナの手料理だ！ラッキーだ。女の子の、それも美少女の！

「いただくよ」

うまい……………。すごくうまい。涙が出そうだ。

特に、味噌汁が心に染みる……………。

「そんなにがつつかなくても、誰もとらないよ？」

だって、うまいんだもん！

ん？何か忘れてる気がしてきたぞ？

……………あ、フリードだ。

「そういえば、フリードはどこに居るんだろうか？」

「私が、一誠くんの様子を見に行った時には、もういなかったよ？」

まあ、アイツは死ななそうだから大丈夫だろうな……………。

「まあ、アイツはその程度じゃ死なないだろう……………」

「そつだね……………」

あ、遠い目をしていらっしやる。何か、人の心が分からないってよく言われる俺でさえも気持ち分かる気がする。

「ところでさあ？何で此処は……………こんなに荒廃しているんだ？」

天井には所々ひびが入りいつ崩れてもおかしくない。某劇的な前後に依頼したいくらいだ。

「それはね……………、ココは天使側が放棄した教会だからなの……………」



つまり、無断で使っていると……………。

「俺の家に来ねえか？親はいないし大丈夫だぞ？」

「ここよりは遥かにましだと思っただがなあ？」

「え、いいの……………？」

「ああ、「ここじゃあまともに暮らせないだろう？」」

「あ、ありがとう！」「誠くんと同じ家……………同棲……………／／／」

あらら……………。何かトリップしちゃまってんなあ？

まあ、可愛いから良いんだがな！

つー訳で、俺の家にレナの荷物を運んでいるんだが……………。

「凄い…大きい……………家だね？い、一誠くん……………」

何か、唾然としていると言つか呆然としているというか………とにかく、そんな表情をしてい。

ま、そうなるさなあ？そりゃあ、この街、最大の豪邸だからねえ………。

「そんな顔をして、俺の家なんだからしょうがないだろ？」

俺はそれだけ言って気にせず、とつとつ、荷物を運ぶことにした。

S i d e O u t

## L i f e ・ 7 (前書き)

レイナールの愛称をレイからレナに変えました。  
いつも以上にgagagagです……。

## Life・7

### Side一誠

レナが俺の家に住むことになり、数日がたった。  
まあ、いろいろあった……。が、それはまた別の機会にしよう。  
取り敢えず今は落ち着いてきた。

ピンポンと、家のインターホンが鳴る。宅急便かあ？  
とにかく、開けるとしよう。

「やあ、一誠くん。何年ぶりになるかな？」

ドアを開けると、俺の師匠と呼んでも差し支えのないほどの人物が  
目の前にいた。

「どうも、霊司さん……。三年ぶりですねかね？」

彼は霊司・P・ナイトメア、吸血鬼と人のハイフらしい。外見は所  
々白の混じった黒髪の青年だ。髪は白髪混じりというよりは、白い  
メッシュが入っているような感じだ。

まあ、実年齢は百をとおの昔に越しているが、だ。

全く、羨ましいもんだ……………。

「確か、遠くの土地の吸血鬼の真祖を討滅しにいったのでは？」

一般人への吸血鬼の過度の干渉を許さないというのが彼の信条であり、三年前に此処を旅立ったのだから、真祖を滅ぼしに行ったからだ。

「ああ、ソイツは倒したんだけど……………。霊華が誘拐されてね……………。それも、悪魔に」

霊司さんは、強く拳を握りしめながら言う。血管が浮き出ており、掌からは血が滴り落ちている。

霊華は、霊司さんの娘だ。家で預かっていたこともあった。だから、妹も同然な少女だ。

さらわれた……………？

「うん……………。僕が真祖を狩っている時にね……………。僕があのと  
き、霊華の傍にいれば……………」

「霊司さんのせいではないですよ。俺も救出に行きますよ。何たって、俺の妹ですから」

「ありがとう……」

「それで、その悪魔はどこが悪魔なんですか？」

「魔王、現ベルゼブブ輩出のアスタロト家のディオドラ、ソイツだよ……」。ん？一誠くんはどうして悪魔のことを知っているんだい？」

そう言えば、俺の近況は説明してなかったな……。

「実は、」

「なるほど、君も大変だったんだね……。 (霊華もライバルができたようだね……)」

「一誠くん、どうしたの？」

二階から、レナが降りてきたようだな。

「彼は、霊司さん。俺の師匠みたいな人だ」

「ご紹介預かった、霊司・P・ナイトメアです。以後、お見知り置  
きを」

霊司さんは礼儀正しいよなあ……………。

ああ？誰だ、俺とは大違いとか言った奴は。夜道には気を付けるよ？

「真祖狩りのファントムと、こんな所で出逢うとは思わなかったよ  
……………」

レナも知っているようだった。まあ、相当の実力者だもんなあ？

「霊司さんの娘……………俺の妹みたいな奴が、アスタロトとかいう悪  
魔にさらわれたらしいんだ。俺は彼女を……………霊華を助けてやりたい。  
力を貸してくれないか？」

「もちろん良いよ？だって、一誠くんの為だもん」

「ありがとう、レナ」

取り敢えず、撫でおこう。ナデナデ……………。

「ひゃづつー！……………／／／」

やっぱり、レナは可愛いなあ……………。

「え、えーっと……………。途中から2人だけの世界に入っているような気がするけど、レナさんも協力してくれるのかい？」

「はい、お手伝いさせていただきます」

「早速なんだけど、アスタロト家の冥界での位置が分からないんだ……………」

そこからですかい……………。

「それなら、わかりますよ？」

レナは知っているようだ。そう言えば、レナは墮天使だったな。すっかり忘れてた。

「本当かい？なら、武装の準備や術式の準備もあるから、明日出発しよう」



今にでも俺の妹に手を出した、塵を駆除しに行きたいが、準備があるなら仕方がない……。」「  
そう言えば……」

「靈司さん、ここに泊まりませんか？」

「ああ、すまないね。お願いするよ……」

「ついで、靈華奪回戦の賽は投げられた。」

Side Out

Side一誠

霊華がさらわれた……。さらった奴はディオドラとかいう人外らしい。  
絶対に殺す。

「い、一誠くん、どうしたの？怖い顔して……」

レナが俺におどおどしながら話しかける。どうやら、霊華をさらった人外への殺意が、顔に出ていたようだ。

「いや、ディオドラとかいう人外を呪っただけだ」

「そ、そうなんだ……。ところで、霊華ちゃんってどんな娘だったの？」

「霊華はね

」

「や、やめて……………」

黒い髪に白いメッシュが入ったような髪型の少女が、理性をなくした人の形をした化物と対峙……………いや、化物に少女が襲われていた。

「ありゃあ、何だ……………？」

そこに偶然、少年が通りかかる。

「良く分からねえが、いい大人が子供虐めてんじゃねえぞ？」

彼は化物に殴り掛かる。

バキッ！という音と共に、少年の拳を止めようとした化物の腕がへし折れる。

「ギアアア！？」

化物は野生動物の鳴き声のような悲鳴をあげるが、何もなかったかのように、へし折れた腕で少女を掴む。

「おいおい……腕折れてんに平気つてのか？人外め」

「ダメ、逃げて……」

少女は彼に、儂く透き通った声で逃げるように忠告する。が、少年は化物を少女から引き離すため再び殴る。

「チツ！何で倒れねえ？」

「コイツは、吸血鬼……。そんなんじゃ殺せない……。これ、使って」

少女は装弾数六発の回転式拳銃を手渡す。コンデンサーの中には銀の弾が六発装弾されている。

「如何にもって感じだなあ……。まあ、いいや」

手渡された拳銃を右手に持ち、化物の脚を撃つ。一発動けない化物に接近し、化物の頭に銃口をつける。

乾いた音と共に銀の弾が撃ち込まれる。二発、三発、四発、五発

化物の頭部から、脳漿やら何やらが大量の血が周辺にぶちまけられる。

「確か、頭をぶち抜かれれば、不老不死でも死ぬんだっただよなあ？  
まあ、心臓も撃つが」

少年は最早、放って置けば霧散する屍となった化物の左胸に銃口を近づけ　引き金を引く。六発  
左胸を銀の弾は突き破り、心臓を貫いて背中をも貫通する。

「別に零距离で撃たんでも良かったかもなあ？」

「……………ありがとう」

少女は返り血で血塗れな少年に言う。

「まあ、気にするな。ところで、お前の名前は？」

「霊華・P・ナイトメア……………あなたは？」

「俺は、兵藤一誠だ」

「これが、靈華と俺の出会いだ。」

「出会い頭から大変だったんだね……………」

「一誠くん、準備が完了したから転移するよ。」

靈司さんが二階から降りてきた。どうやら、魔方陣の設定その他諸々が終わったようだ。

「では、行きましょうか。」

俺は真っ先に淡いく青い魔力の魔方陣の中へ飛び込む。

やっぱり、ファンタジーみてえだなあ？誰か科学的に証明してくれねえか？

「さっさと行くよ？一誠くん……………」

霊司さんは鋭い殺気を周囲に放ちながらアスタロトの領地を突き進む。

途中、進路を阻む人外が現れるが、何処からともなく取り出した刃の青白い刀で切り刻む。

容赦ねえなあ……………？流石は霊司さんだな

「真祖狩りのファントム……………」

レナは少し怯えている。まあ、あんなに物静かだったのにここまで変わるんだから無理もねえか……………。

「おい、その人外。ディオドラとかいうクソガキは何処にいる？」

まだ、靈司さんが刻んでいない人外を取っ捕まえて、フリードから借りていたの光刃剣を首筋に当てながら聞く。

「答えるものか！」

「ああ、そう？じゃあ死にな」

そのまま光刃剣を振り下ろす。人外の頸は断ち切られ、頭部は地面に落ちる。

はあ、使えねえなあ？

「一誠くん。あっちの屋敷から、上級悪魔の気配がするよ？」

レナがディオドラとやらが屋敷にいるのを確認したようだ。

さて、血祭りにあげてやるよ……………

Side Out



Side一誠

今、屋敷に向かう途中なのだが、如何せん俺達の行く手を阻む人外が多すぎる。

「……………一誠くん。ここは僕が何とかするから、二人は屋敷に行ってくれないかい？」

「そ、そんな無茶ですよ!？」

「わかりました。では、頼みます。……………行くぞ、レナ、ここに居れば足手まといになりかねない」

レナを連れて目前の人外を光刃剣で斬って掻き分けながら屋敷へ向かう。

「靈華を取り戻してくれ……………。さあ、悪魔達。言い残すことはあるかな?まあ、興味も聞く気も無いんだけど……………」

「本当に大丈夫なの？」

「ああ、問題ねえよ」

俺とレナは屋敷の内部にいる。侵入を阻止せんとする人外を片っ端から斬って、あるいはレナが光の槍で貫いて……………を延々と繰り返し、何とか侵入できた。

「確か、アスタロトとか言っていたが、どんな悪魔なんだ？」

俺は全くわからんから詳しいであろうレナに聞いてみることにする。

「アスタロトはディアボロスとも呼ばれる悪魔なんだよ。過去と未来を見透かすともいうね」

ディアボロ？あの辛いイタリア料理のことか？

「えーと…………それは食べると舌が業火に焼かれた罪人ピリピリするから、そう言われてるらしいよ?」

思考を読まれた…………。

と、こんな風に屋敷内部を強い魔力とやらを感じる方向に向かっていくと

「ここから先はお通ししませんわよ?人間風情が」

シスター服を着た女が5人ほど俺達の前に立ちふさがる。だが、こいつらは悪魔だ…………。とんだ背徳者だなあ?しかも腹立つ。胴体、上から下に貫通させてえ…………。

「一誠くんの邪魔をするのは許さない…………」

れ、レナが怒っていらっしやる?何でだ?

まるで、ゴミを見るような目で、レナは人外×5を見る。そして…

…………

「死んで?」

ゾツとするような声音で呟くと、さっきまで遣っていた光の槍とは全く大きさの異なる、巨大な槍を形成し

「キヤア!？」

そのまま刺し貫く。まず一人が光によって霧と化した。

「レナが頑張ってるのに俺が何もし無いつてもなあ?それに、背後を取られんのも気に食わねえ……」

振り返ると同時に、反動を用いて裏拳を人外に当てる。バキッ!と音を立て鼻がへし折れる。

「……………!？」

「黙れ」

懐からナイフを取りだして、喉に突き立てる。最早、人語ではない嗚咽をあげてその場で悶える。

「じゃあな。……………『迷宮絲』」

絲が悶えている人外の首を締め上げて、そのまま絞殺する。二人目

だな。また、レナが相對している人外を除いた残りの二人を續いて締め上げる。

弱えなあ……………コイツら。ディオドラとかいうクズはハーレムでも作るつもりなのか？

まあ、靈華に手を出した時点で奴の死は確定してるがな……………。イライラしてきたから、二人の内一人を締め上げる力を強め、苦しむ姿を見ながらナイフを突き刺す。ズブツ！ズブツ！と音を立てながら、必殺となりえない右足、左手、右目……………etcを執拗に突き刺す。

「死にたいか？」

「こ、殺し……………て」

途切れ途切れに自らの殺害を俺に懇願する。

「いいぜ？ただし、苦しんで貰うがな……………」

光の出力を大幅に弱めた光刃剣で、じわじわと人外の身体を霧と化させながら左胸をじっくりと刺し貫く。三人目だな。

「次はお前だぜ……………って何かもう死んでるし……………」

どつやら、舌嚙んで自殺しちゃったようだ。残念だ、遺憾だ、興ざめだ……………面白くねえ。  
ディオドラ……………テメエの臣下の分も苦しませてやるからな？

S i d e O u t

Side一誠

「一誠くんの邪魔をするから悪いんだよ？」

レナが怖いです。笑いながら人外シスターの一人を光の槍で突き貫く。しかも、目が笑ってねえ……。起こらせないようにしよう  
.....

「俺は、暇にな.....ツと！」

魔剣を携えた人外が俺を背後から襲う。いや、襲おうとするって言った方が正確だなあ？なんせ

「な、何なのよ！？この糸は.....!!」

なんせ、『迷宮糸』を張り巡らしてたんだからなあ？  
つか、この人外も女か.....。うらやま.....ハッ！？レナがこちらを睨んだ気がする.....。

「さてさて、お前はどうか壊そうか？」

「い、イヤ!? やめて……………!」

逃がす気なんて更々ねえよ。この前、一人遊び損ねたし?

「無理」

とりあえず、うるさいから喉にナイフを投擲して、刺そうとするが、ちょうど『迷宮絲』を魔剣で斬られてしまった。

「これで、あなたは武器をつかえないわ!」

人外は俺が外した、ただのナイフを魔剣で粉碎し勝ち誇ったように言い放つ。

気に入ってたんだけどなあ……………。

「俺さあ? ナイフ一本しか持ってない訳じゃないけどソレ、結構気に入ってたんだよ。ムカつくから、苦しんで死ね」

例の処刑台擬きを『迷宮絲』と光刃剣で作り、ゆっくりと絲を引っ張る。悪魔にとっては毒出しかない光が、だ。



「さてさて、ここで選択肢ができました。ディオドラの居場所を教えるか殺されるか。どっちが良い？」

「お、教えるか……ら、許して！ディオドラ様は、ここからまっすぐ行つた所にある一番大きな部屋にいるの……！ねえ、言ったでしょ！？助けてよ……！」

俺は黙つて糸を引く力を強める。

「え？な、なんで!？」

ハア？なに勘違いしてんだ？コイツ……

「俺は一言も助けてやるなんて言つてねえぞ？人外が。さて、無とやらを楽しんできな！」

「い、イヤ」

一気に糸を引っ張る。首は胴体から断たれて吹き飛ばされる。レナも終わったかな？

S i d e O u t

S i d e レナ

「ここから先はお通ししませんわよ？人間風情が」

シスター服の悪魔が一誠くんに対して言う。

私は一誠くんが好き。

一誠くんは自分を殺そうとした私を許してくれた。そして、どんなに危険か解った上で私に協力してくれた。

「一誠くんの邪魔をするのは許さない……………」

ただの転生悪魔が、一誠くんを邪魔するなんて許さない……………。  
私は今、きつと、この悪魔をかなり睨んでいると思う。だけど、そんなのどうでもいい

「死んで？」

一誠くんの邪魔をする奴なんて死んじゃえばいいんだ……………。  
私は光の槍を形成する。いつもの槍とは比較できない位の巨大な槍

を……  
槍を目の前にいた、一誠くんを侮辱した女の悪魔に向けて槍を構えて

「キヤア!？」

一瞬で貫く。勿論躊躇なんてしてない。する気もない。

「まだ、いるよね？」

私は隠れていた悪魔を見つけて槍を投げる。

「あ、危なかったわ!？」

どうやら外しちゃったみたいね。まだ作れるけど、別のを試してみよう。

「一誠くんの邪魔をするから悪いんだよ？」

淡い緑色の光の球体が空中に現れる。私の持つ『聖母の微笑み』の効果………。そして

「<sup>リバー</sup>反転！」

私の放った高濃度の回復の光の球体は、その性質を反転させて、対象を傷つけるだけの魔力のエネルギーとなる。

これは、上から渡された神器『追憶の鏡』……。相反するものを逆にするために作られたもの。  
だから、

「消えて！」

圧縮された魔のエネルギーは、波動砲のように放たれる。  
赤い魔のエネルギーに飲まれた悪魔は、波動が止まる頃には完全に消え去っていた。

S i d e O u t

L i f e · 1 0 (後書き)

『追憶の鏡』の能力を少し変更しました。  
そして、レナが……

L i f e ・ i i 1 (前書き)

あけましておめでとうございます

そして、新年最初の投稿が一番短いという……

Side一誠

「レナも終わったか？」

まだ戦闘が行われている場所の方に視線を向けると、レナの放った赤い魔の波動が一直線に伸びていた。そして……波動が消えると残ったのは何もなかった。何だよコレ、ドラゴン波かよ……。

「あ、一誠くん大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ」

レナは無事なようだ。良かった、良かった。さて、ディオドラを殺しに行くか。

「無理矢理、シスター服悪魔の一人からディオドラのいる場所は聞き出した。まっすぐ行った所の一番大きな部屋だよ」

「分かった。早く行こう？」

「いや、その必要はないよ」

コイツが……

「僕がディオドラ・アスタロ……」

「もう喋るな、反吐がでる」

言い終わらない内にディオドラを殴る。チツ、どつやら頬骨が折れただけか……

「クツ！？何をするんだ！人間風情が！」

「靈華を今すぐ返せ……」

「イヤだね！彼女には絶望した上で僕のモノにしてやるんだ！靈華はまだ処女だよ？僕は処女から調教するのが好きだから、たかが人間のお古何てイヤだからね」



殺す。俺の中の殺意が逆巻き、荒れ狂う。俺はこれまで生きてきて、ここまで殺意を抱いた事はないだろう……。

「黙れ。レナ、霊華を探して来てくれ……コイツは、俺が殺す」

「分かった……無理しないでよ？」

レナが行くのを見届け、光刃剣にありったけの力を込めてディオドラを斬ろうとするが……

「その程度じゃ効かないよ？」

魔力の壁に防がれてしまう。さらに、

「邪魔だから死んで？」

ディオドラが手を上に翳すと魔力で作られた鋭い円錐状の刃が、幾重にも出現され

鋭い切っ先が俺に向けて射出される。これはかわしきれないなあ……

……  
使いたくなかったが……

「ふふふ、人間ごときが僕に敵うと思うのがまちがいなんだよ」

「何の話だ？クソガキ……………」

右の肘から手首を籠手が覆い、黒い闇が包み込む。ディオドラの攻撃は全て闇に飲み込まれる。

「な……………！？」

驚愕するディオドラの背後に回って、魔力を纏わせた籠手で殴る。

「『『『 迷宮絲』……………』」

糸を放出して、ディオドラの腕に絡め、糸に魔力を流し込んで破裂させる。

「あ、ああああ！？腕が……………！？クソ！なら、オフィスから渡された蛇を飲めば！」

ディオドラは瓶に入った黒い蛇を飲み込む。すると、元々のディオドラを遥かに越える魔力を感じる。  
ドーピングかよ……………

「死ね！人間………！」

先程とは比べ物になら無い程の量と質の魔力の刃が現れ、俺に降り注ぐ。

「がああああ！」

とてつもない痛みが俺を苦しめる

おい、神器……俺に応えろよ……力を寄越せよ……

——良いだろう。ただし、対価が必要だぞ？

構わない……俺の左眼をやるよ

——いいいぜ？後悔しても知らんぞ？

『Paganism・Heretic・Balance Brea  
ker?!』

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

Life・12(前書き)

短いです……

Side一誠

『Paganism・Heretic・Balance・Breath  
ker!!!』

俺の体を闇と光が包み込む。ディオドラの攻撃は全て掻き消される。双方が止むと、鎖に繋がれ、胸部に十字架のあしらわれた白と黒のツートンの鎧 プレート・アーマーが纏われていた。左眼が見えない……。ご丁寧に対価を持っていかれたか……

「そ、そんな……!？」

驚愕するディオドラ。コイツは何だ?何回、驚愕してんだよ? まあ、取り敢えず

「殴るか？」

メキツ!と音をあげてディオドラは壁まで吹き飛ばされる。おうおう、スゲー威力だな?眼をくれてやっただけはあるか

「さっきまでの威勢は何処へ行った？クソガキ」

ディオドラを見ると、目前に迫る鎧に対しての恐怖により震えている。

ザマア見る

「くっ！こんなことで！僕は上級悪魔だ！現魔王ベルゼブブの血筋だぞ！？」

性懲りもなくディオドラは無限に等しい魔力弾を放つ。

俺は右手を翳して魔力を防ぎ、飲み込む。そして

「そうになると、魔王ってのは人間以下って訳だ」

ディオドラの放った魔力弾の数倍の量の魔力弾を右手から放つ。

威力も質も凌駕する俺の魔力弾は、未だに放たれるディオドラの魔力弾を打ち消して、奴自体にもダメージを与える。

「靈華にまだ何もして無いよなあ？」

一歩一歩ゆっくりと、ディオドラに近づく。奴の目前まで迫って拳を振り上げる

「下級で下劣で下品な人間ごときに気高き血が負けるはずがないんだッッ！」

奴は幾重にも幾重にも防御障壁を作り出すが……

「悪魔風情が、口を慎め」

殴りつける。バリッ！と音を立てて、一枚も障壁を残すことなく打ち破る。

そのまま奴の頭を掴み、魔力を奪い取り

「僕の魔力が……！？嘘だ！」

投げ飛ばす。

「さて、もう一回聞けど？霊華にまだ何もして無いよなあ？」

ディオドラは瞳を恐怖で潤ませながら何度も頷く。

まあ、だからといって許さんが、なあ？

「さて、どう殺そうか？」



既に左腕は破碎したしなあ……。取り敢えず右腕も壊すか？

「『迷宮絲』……………」

絲を糸鋸のように動かしてじわじわと右腕を切り取る。

「ギアアアア!?!」

達磨にしよう! そうしよう!

光刃剣に光の刃を出現させて両脚を切り裂く。当然、殺すわけだからまだ終わらない。ディオドラの周囲に魔力の刃を出現させて一気に突き刺す。勿論死なない程度に調整して、だ。

「さあ、哭き叫べ」

以前俺が靈華から貰った、倉弾数六発の回転式拳銃を取り出し

「や、やめてく……………!?!」

「やなごった」

躊躇なく引き金を引いた。

S i d e O u t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1950z/>

---

Paganism.Heretic.

2012年1月2日00時52分発行